

レイモンド・ウィリアムズと文化研究の理論的遺産について

粟谷 佳司

AWATANI Yoshiji

はじめに

レイモンド・ウィリアムズは、イギリスのカルチュラル・スタディーズの源流として常に言及されている。スチュアート・ホールも論文の中でウィリアムズを取り上げているが、このことは懐古的にふりかえられているだけではない。ホールは、自らの方法論を確立するために、イギリスの思想的な伝統からカルチュラル・スタディーズへの橋渡しとして、積極的にウィリアムズについて議論しているのである。

ウィリアムズは、文学研究者として知られているが、そのフィールドは文学のみならず、むしろ社会学を射程に入れながら「文化の社会学」(Williams 1981=1995)を構想していた。本稿では、カルチュラル・スタディーズの理論形成における思想的な側面を明らかにするために、その源流として取り上げられたウィリアムズの初期の著作における文化の定義を中心にして考察する。

第1節ではウィリアムズが伝統的な思想の中から何を継承しているのかを探ることにする。それを、初期の著作『文化と社会』、『長い革命』から考察しよう。ところで、『長い革命』はカルチュラル・スタディーズを語る上で、それまでの思想の「伝統」からの「断絶」のテキストとして捉えられることもあるが(Stray 1993: 43)、そこで展開されている文化の定義に『文化と社会』を重ね合わせることによって、むしろ

ウィリアムズは「伝統」のなかから思考しているということが明らかになる。そうすれば、「下からの歴史」(Dworkin 1997)ともいわれるウィリアムズの労働者階級に対する共感とそこから導かれる「文化は日常である」(Williams 1958a)に至る道筋が、必ずしも「伝統」からの「断絶」だけでは捉えきれない思想(あるいは「観念」)の動きと共に彼のおかれた複雑な立場が見えてくる。ホールがウィリアムズのどこに重点を置いているのかと併せて考察しよう。

また、カルチュラル・スタディーズの形成においては、ウィリアムズの理論的な営為はある視点から読み換えられることになる。それが、アルチュセールの構造主義の知見であった。続く第2節では、構造主義によってウィリアムズの何が継承され批判されたのかを探ることによって、カルチュラル・スタディーズにおける構造主義のインパクトとそれを越え出る契機についても議論する。

1. 伝統の拡張としての文化の理論

伝統からの連続

カルチュラル・スタディーズは1950年代半ばに現れた。もちろん、これは現在から振り返ってのことである。なぜなら、カルチュラル・スタディーズは「純然たる始まり absolute beginnings」を持たず(Hall 1986: 33)、学派

を形成していたわけではないので、それが幾らかでも明確な形になるには、1964年のバーミンガム大学における現代文化研究センターの設立とその後のセンターでの活動を待たなければならぬからである。

しかし、ともかく、ホールはこの時期にカルチュラル・スタディーズという新しい領域を区切るテキストとして、バーミンガム大学現代文化研究センターの初代所長のリチャード・ホガートの『読み書き能力の効用』(1957)と、ケンブリッジ大学の演劇学の教授であり、イギリスのニュー・レフト運動の理論的支柱の一人であった、レイモンド・ウィリアムズの一連の著作、『文化と社会』(1958)や『長い革命』(1961)、さらには、歴史社会学者のE.P.トムソンの『英国労働者階級の形成』(Thompson 1980)について言及している。彼らは、後に「文化主義 Culturalism」と呼ばれ、ポピュラー文化、すなわち「民衆(人々) the people」の文化を、特に政治的文脈から考察することに視点を開かせたのである。このような視点は、カルチュラル・スタディーズの研究に受け継がれた一貫した姿勢であった。

また、これらのテキストは、イギリスにおけるマシュー・アーノルドやF.R.リーヴィスらの「文化と文明化 Culture and Civilization」の伝統から、カルチュラル・スタディーズへと移行する上での断絶としても位置づけられている(Stray 1993: 43ff)。しかし、ホガートやウィリアムズの著作をめぐるこの当時の政治的背景 political contextとして、「イギリスのアメリカ化」と、「ニュー・レフトの出現」が挙げられている(Grossberg 1993: 28)ように、彼らにはイギリスの「アメリカ化」すなわち「大衆化」に対するイギリスの思想の「伝統」という遺産をどのように受け継ぎ再構成するのか、というもう

一方の側面を備えていたことも見逃せない。それはこれから見ていくように、ウィリアムズの「文化」の定義の中にも少なからず影響を与えている。

カルチュラル・スタディーズの源流として、ウィリアムズと伴って言及されるホガートは、イギリスの高名な文芸批評家、F.R.リーヴィスなどの経験主義的「実践 批評」¹の精神により、「文学から日常生活まで」(Johnson 1986/7: 38)を考察対象としていた。ホールは特に『読み書き能力の効用』では、労働者階級の文化を、それがあつた種の「テキスト」であるかのように、その文化のパターンと配列に具現化された価値と意味を「読む」ことに着手していたことを評価している(Hall 1986: 33)。

しかし、ホガートに対しては、ホールの評価にも係わらず、ディック・ヘブダイジによって次のような指摘がなされている。つまりイギリスの「アメリカ化」、大衆化に伴う「大衆文化」と関連した伝統の「レヴェルダウンのプロセス」というネガティブなコンセンサスは、前衛的なポピュリストである作家のジョージ・オーウェルやエリート主義者のT.S.エリオットと同様、社会民主主義者のホガートにまで共有されたものであった、ということである(Hebdige 1988: 50-51)。「アメリカ化」による大衆文化の進展と大衆の登場は彼らにとっては好ましからざるものだったのである。

ところで、ウィリアムズの場合はどうだろう。ウィリアムズは『長い革命』において彼の著作『文化と社会』について、「文化の観念」をめぐる産業革命期の「十八世紀末以降のイギリス社会の諸変化に対して行った反応を説明し解釈する試み」(Williams 1958b: 11)であると定義している。『文化と社会』において、ウィリアムズは「社会的、経済的、政治的生活に起こつた

諸変化に対する重要で連続する反応」(ibid.16)として定義されるイギリスの思想の長い伝統を「インダストリー、デモクラシー、クラス、アート」(ibid.xiii)との関連から、特に「文化」という言葉の変遷を中心に再構成したのであった。

「この書物(『文化と社会』)において、私は伝統の解釈を試みたが、これを起点として、文化の理論を生活の仕方全体 a whole way of life に内在する諸要素の間の関係を明らかにする理論として把握して、諸原理の完全な再言明に進むことも可能であろう。」(ibid.12)

『文化と社会』においては、18世紀から20世紀にかけての思想家達の「文化」について抱かれる「観念」のレベルが扱われていたわけだが、

引用からも明らかなように、ここから、『長い革命』において、文学や芸術も、コミュニティを中心とした日常生活のコミュニケーションにおいて捉えられるとする「生活の仕方全体 a whole way of life」に視点が向けられることになる。

しかし、これをすぐに伝統からの「断絶」として捉えるべきではなく、ウィリアムズの文化の概念にはこれから見ていくように、むしろ思考の流れとしては遺産の相続という連続性が意識されているとみるべきである。それは、例えば、イギリスの「伝統に対する裁断ではなくて、一定の意味と価値の方向へ伝統を伸張することを試みるものである」(Williams ibid.xix)という彼の言明にも現れている。では、「一定の意味と価値の方向へ伝統を伸張する」とはどういうことだろうか。ウィリアムズのいう文化の定義の中にそれを見ていく

ことにする。

「文化」の定義

ウィリアムズは『長い革命』のなかで「文化」の概念には三つの定義があると論じている(図1)。「文化」の単一の、問題のない定義はここでは発見できない。だから、この概念はこれから述べる三つの定義が絡み合った複雑なものとして捉えられているのである。なお、この「文化」の定義については、ウィリアムズがイギリスの伝統の遺産をどのように相続したのかという観点から考察する。そのために、『長い革命』に『文化と社会』を重ね合わせながら当該の記述を参照する。

Definition of culture	Type of analysis
1 The 'ideal' state or process of human perfection	Discovery and description of 'timeless' values that refer to the universal human condition
2 'Documentary' -intellectual and imaginative work reworking human thought and experience	Activity of criticism
3 'Social' -culture as a way of life	Clarification of meanings and values in art, learning and institutional life, and in everyday behaviour

(図1 出典 Eldridge and Eidridge.1994.p.78より)

ウィリアムズは、まず第一に「文化」を「理想」とする考えを取り上げている。「文化は、或る絶対のあるいは普遍的な価値に基づく、人間の完成された状態、あるいは、完成へと向かう過程である。」(Williams 1961=1983:43)

これは永遠の普遍的な価値に基づく人間の状態を発見し記述することである。このような考え方は、「文化」という絶対的で普遍的な価値である「理想」によって人間の総体的totalな完成

を目指すという、十八世紀後期から発達してきた文化を人間の成長の過程とする人文主義的なトーンに貫かれている (Williams 1976 : 87-93)。

そして、これに続いて、二番目に挙げられている定義は、文化を「記録」とする考えである。この定義では、「文化は、知性と構想力を働かせて作られたものの全体であって、細かなところまで、人間の考えや体験のさまざまな姿が記録されているものである。」(Williams 1961=1983:43)とされる。これは、一番目の文化の定義の「理想」、「即ち、「この世で考えられ、語られた一番良いもの」を見つけた」(ibid.43)して記述するという過程も含まれる。

ところで、この「この世で考えられ、書かれた一番良いもの」という表現は、もともとは十九世紀のイギリスの文明批評家、マシュー・アーノルドの『教養と無秩序』(1935)の一節に見出され、そこから採られたものであった。アーノルドは、伝統的な文化の「理想」すなわち「教養Culture」によって、産業主義に対する社会的影響、具体的には社会が産業化されることにより登場した労働者階級、大衆、さらには「野蛮人」(地主である貴族階級)、「教養のない俗物」(中産階級)をも教化しなければならないと説く(イングリシ 1992:50)。ウィリアムズは、アーノルドの『教養と無秩序』には「まったく明白に、「教養」が「無秩序」に代わるべきものとして提示されている」(Williams 1958b:113)と言っている。

では、アーノルドは「教養」をどのようなものとして捉えていたのだろうか。『教養と無秩序』には次のような記述が見られる。

「教養を、イギリスの現在の窮境を大いに救うものとして、推奨することにある。教養とは、われわれの総体的なtotal完成を追求することであり、それにはまず、われわれにとってもっと

もかかわりの深いすべての問題について、この世で考えられ、語られた一番良いもの the best which has been thought and said in the world を知るようになり、さらにこの知識を通じて、われわれのおきまりの意見と習慣とに、新鮮な自由な思想の流れをそそぎかけるようにすることである。」(Arnold 1935:viii)

アーノルドのいう「イギリスの現在の窮境」とは、具体的には産業革命以降の社会のことであるが、これを先ほどのイギリスの「アメリカ化」に伴う文化の「レヴェルダウン」のプロセスに重ね合わせることもできるだろう。ウィリアムズは、アーノルドの一節を好んで引用するのだが、引用から明らかなように、ここでウィリアムズの言う文化の定義は、最初の定義と同様、文化を「理想」から価値付けするという側面が強調されている。このような「理想」としての文化の側面はウィリアムズの思想のなかで重要な位置を占め、特に教育に関する発言のなかで何度か立ち現れてくる。

「生活の仕方全体」

そして、三番目の文化の定義が、文化を「生活の仕方全体」とする考え方である。この定義によれば、文化とは、「特定の生活の仕方を記すということ」であり、このような「特定の生活の仕方は、芸術や学ぶということの中だけでなく、さまざまな制度や日常の行動の中にもその特定の意味と価値とを表現する」(Williams 1961=1983:43)ということである。

それまでの定義が、「文化」という概念の内包を「観念(理想)」の領域とともにとりあげられたとするならば、この定義はウィリアムズがルース・ベネディクト(「文化の型」)やエーリッヒ・フロム(「社会的性格」)に言及していることから窺えるように、いくぶん人類学(人間

学) 的なもので、社会实践に関係する「文化」の局面も取り上げられる。「文化」とは一つの実践ではなく、「モーレスやフォークウェイズ」の合計でもなく、社会实践の全てであり、社会編制すなわち経済や政治、文化のあいだの相互関係の合計として捉えられている。

「生活の仕方全体」には、これまでみてきた文化の定義によれば全く文化とは呼ばれないもの、すなわち「生産の組織、家族の構造、さまざまな社会関係を表現あるいは規定しているさまざまな制度の構造、その社会の構成員がコミュニケーションする時の独自の形式」(ibid.43)なども含まれる。つまり、文化の分析は「それらの関係の複雑性の組織の性質を発見する試み」となる。ここから、ウィリアムズは「文化」の理論を、「生活の仕方全体のなかにあるさまざまな要素の間の関係のあり方の研究」(ibid.48)であると定義するのである。つまり、文化の分析は「特定の生活の仕方、特定の文化の暗黙の内に、また、はっきりとした形で含まれている意味と価値とを明らかにすることである」といわれるのである (ibid:43)。

そして、ウィリアムズは、「われわれがときに「文化」と呼ぶもの—宗教、道徳律、法体系、一群の芸術上の作品—は、生活の仕方全体である文化のほんの一部—意識的な部分—と解されねばならない。」(Williams 1958b:237)と定義することによって、「生活の仕方全体」を「文化」を包括する概念にまで引き上げるのであった。しかし、ここで注意しなければならないことは、この「生活の仕方全体」という概念は、具体的に意識的なものだけを指すのではなく、多分にその文化の無意識的な構造が念頭に置かれている、ということである。

そして、ウィリアムズは「生活の仕方全体」から導かれる、意識的で感性的な人間の生活の

中にある要素のひとつである「感覚の構造 structure of feeling」にも言及している。「感覚の構造」は、ウィリアムズによれば、「一つの時代の文化である」と定義され、社会を「全体性」として、「断片化」に抗するものとして構想されている。ここでは文化の「創造する働き」と「生活の仕方全体」の間の関係におけるコミュニケーションが重視される (Williams 1961=1983.49)。例えば、ある時代の芸術作品でさえ超越的なものではなく社会のなかに位置づけられながらその時代の特徴を表し、コミュニケーションの媒体としての働きを持つということであり、「そのようなコミュニケーションを可能にする現実の生きた感覚、深いコミュニティが源として当然に働いているという事実」(ibid:41)が強調されているのである。つまり、文化とはコミュニティを中心とした様々な要素の相互作用によって形成されるのである。これは、ホールがウィリアムズの方法論を評して「ラディカルな相互作用」と呼ぶものであった。しかし、このような「全体性」、「感覚の構造」は次節で見ると、ホールによって構造主義による改訂を加えられることになる。

ところで、ここで文化を「生活の仕方全体」として捉えることで浮かび上がる重要性は、それまでの批評における思考の伝統に対する「断絶」とも考えられるが、しかし、もともとウィリアムズのいう「生活の仕方全体」という概念も、イギリスにおける保守的思想家、T.S.エリオットのいう「一つの国民の生き方全て」からとられている (Eliott 1948:31)。このことから解るように、ウィリアムズのいう「生活の仕方全体」もそれまでの思想からの全くの「断絶」というわけでもないのである。しかし、もちろん、ウィリアムズはこの概念の内包する意味を全てエリオットから受け取ったわけではなかつ

た。

エリオットは『文化の定義のためのノート』(Eliot 1948)においてカール・マインハイムの『転換期における人間と社会』を引きながら、マインハイムのいう「エリート」と「階級」の区別が「エリート」を「原子論的」に孤立させてしまっているとし、社会階層を「有機論的」に捉えるために「生活の仕方全体」を持ち出してくるのだが、ここにウィリアムズはエリオットの「保守主義」的なトーンを見つけている。

「エリオットは、複数のエリートの必要性、むしろひとつのエリートの必要性を認めた上で、(社会の) 全般的な連続性を保証するためには、私たちは社会諸階級を保持しなければならない、特に、エリートが重なり合い、絶えず相互に作用するひとつの統治された社会諸階級を保持しなければならない」と主張する」(Williams 1958b:241)

このようにウィリアムズは、エリオットが結局は、彼の観念を翻訳してみると、彼が推奨するものは社会的に実質上存在しているものであるエリートと階級を結びつけているとして、エリオットの本質的な「新保守主義」的性質を拒否したのである。なぜなら、エリオットの考えでは、階級なき社会と国民教育制度を要求する力を封じ込めることになるからである。しかし、それでもウィリアムズが、「生活の仕方全体」によってイギリスの文化に横たわる無意識の「下部構造」を見ようとする際にエリオットから論理を引きつけてしまうのは、「一定の意味と価値の方向へ伝統を伸張する」という観点からの当然の帰結であると思われる。

カルチュラル・スタディーズの源泉としてウィリアムズに言及するにあたって、ホールはウィリアムズのいう「文化」の概念はそれ自体、

民主化され社会化されることになる、という。つまり、それはもはや「考えられたり語られたことの最も良いもの」を合計したような理想としては構成されないというのである(Hall.op.cit.37)。これは、これまで見てきたように、ウィリアムズが文化の第三の定義「生活の仕方全体」にかなりのウェイトを置いていることが、ホールらの言及からも窺える。そして、このような考え方は、ウィリアムズの1958年の論文において、既に予告されていたものだった。

「文化とは日常である。それこそが、わたしたちの出発点である。」(Williams 1958a:5)

しかし、この言明によってウィリアムズは、過去の伝統を全く清算したわけではないのである。ウィリアムズはもちろん、文化の「理想」の側面を切り捨てたのではなく、三つの文化の定義は、互いに独立しているのではなく、文化の理論においては、これら三つの領域の事実が含まれていなければならないという。例えば、文化の「理想」の側面は、先に言及したように、『長い革命』において文化の定義のなかにアーノルドの一節をそれと明示せずに参照しているが、これは、自身が成人教育Adult Educationに携わったこともあり、アーノルドから「教養」という「この世で考えられ、語られた一番良いもの」を受け取ることによって、それを教育から達成しようとする意図のためであった(Williams 1980=1997:3-8)。

確かに、ウィリアムズのいう「一定の意味と価値の方向へ伝統を伸張する」とは、「生活の仕方全体」に見られるように、「芸術や学ぶということの中だけでなく、さまざまな制度や日常の行動の中にもその特定の意味と価値とを表現する」というところまで拡張されたわけであるが、しかし、エリオットから借用された「生活の仕方全体」も、その定義は、ホールのいうよ

うに民主化され社会化されているが、ここでいう民主化とは先にも触れたように階級の廃絶と国民教育制度の要求というかたちに結実されるように思われる。だから、そこから結果として導かれる「考えられたり語られたことの最も良いもの」という考え方の教育による達成は放棄されていないのである。

またウィリアムズは、「生活の仕方全体」によってイギリス国民の文化に横たわる下部構造を見ようとしたが、これもアメリカナイゼーションによるイギリス文化の危機に対する反応の現れと見る事が出来るだろう。イギリス文化に対するこのあたりの価値観は、アーノルドやエリオットと通低するものがある。つまり、アーノルドやエリオットのような思想家たちの「理想」としての文化の「伝統を伸張する」ことによって、ウィリアムズの文化の理論は構成されているわけであり、この点では、彼はイギリスの思想の伝統の継承者と見ることが出来るのである。

もちろん、ウィリアムズの立場は複雑であり、ここでいう「伝統を伸張する」とは、エリオットのいうエリートによる社会の統治をそのまま肯定するのではなく、伝統の理論的遺産のなかから階級が廃絶され教育に対しても開かれた社会をどのように構想するのかということを常に意味させていた。それでも、このあたりのウィリアムズの態度（や文化の定義）は、見られたようにアーノルドやエリオットからは必ずしも自由ではなく、彼の信ずる社会主義から部分的離脱をして悪しき「伝統」を擁護している（トムソン 1962）という批判を受けることにもなる。

それにもかかわらず、ホールはウィリアムズの活動をカルチュラル・スタディーズのパラダイムのひとつとして取り上げる。しかし、ホー

ルは次節で考察するように、ウィリアムズをそのまま受け入れるのではなく、アルチュセールらによる構造主義的なマルクス読解の知見との相同性をもとに、その理論的遺産の読み返しを敢行するのであった。

2. カルチュラル・スタディーズにおける構造主義と文化主義

構造主義とイデオロギー

カルチュラル・スタディーズにおける「文化主義」の潮流は、「構造主義」のインパクトによって積極的に読みかえられることになる。なぜなら、「文化主義」における文化の概念にはアルチュセールらの「構造主義」にみられる「イデオロギー」の概念が欠けていたからであり、ホールはウィリアムズには文化に遍在するイデオロギーを概念化することができなかった、と批判している（Hall 1986:40）。そこでホールは、カルチュラル・スタディーズにアルチュセールらの「イデオロギー」の概念を接合したのである。

もともと、構造主義と文化主義の関係においては、マルクス主義の評価に対しての基本的な類似点が見出される（Hall op cit:41）。それは「土台（下部構造）／上部構造」の問題に端的に現れている。なぜなら、ウィリアムズは、既に『文化と社会』において、古典的なマルクス主義がいうような、文化や芸術のような上部構造は経済という土台（下部構造）の反映に過ぎないという見解から断絶していたのであった（Williams 1958b:265-284）。これは、カルチュラル・スタディーズに少なからず影響を与えた、ニュー・レフト運動の中心人物の一人であり、歴史学者のE.P.トムソンE.P.Thompsonにも共有

されていたものだった(デザン 1993:73-74)。彼らの議論は、俗流唯物論や経済決定論へ反して構成されていたのである。

そして、構造主義もこのような土台(下部構造)／上部構造のメタファーからのラディカルな断絶を共有している。周知のように、レヴィ＝ストロースは言語学や音韻論の成果を人類学に取り入れ、親族体系のなかに言語の構造との相同性を発見し、無意識の領域に考察が及んだ。アルチュセールも、マルクスの経済学を「構造」の観点から考察し、イデオロギーの相対的自律性を議論した。つまり文化主義者と構造主義者は、「上部構造」を特殊で効果的なものとして定義していたのである。但し、アルチュセールは「上部構造」は「下部構造」から相対的に自律しているだけであり、「最終審級」においては経済が決定権を持つ、という考えを保持している。ここが、後にホールらに批判されることになる。

それでも、アルチュセールら構造主義のカルチュラル・スタディーズへの影響は大きかったのである。それを、これから取り上げてみよう。なお、ここでは文化主義が構造主義によってどのように読み変えられ、交わるのかについて、ホールの論文から「経験」と「イデオロギー」の概念を中心に考察することにする。この「経験」の概念については、構造主義と文化主義の認識における分岐点になる。

「経験」

ウィリアムズは、感性的人間のプラクシス praxis、つまり歴史を作り出す人間のアクティビティを重視した。このような立場によれば、「文化」は、社会集団と階級に区別された存在条件を「操縦」し、それに応える所与の歴史的諸条件との関係を基礎とした意味と価値の両方とし

て定義され、それらの「理解」が表現されることを通じて具体化された、生きられた伝統や実践として定義される(Hall 1986:39)。

そして、ここで問題とされるのが「経験」という概念である。ウィリアムズは、『長い革命』の序文のところで「われわれにとって一番重要なわれわれ自身の経験の大きな部分」(Williams 1983:3) というようにその重要性を説いていた。そしてウィリアムズは「生活の仕方」のなかに「経験」を吸収するのである。また、E.P.トムソンも、「経験」という歴史における「生きられた lived」領域を中心にした研究を行っている。そして、アルチュセールのいう「アンチ・ヒューマニズム」、「理論偏重」を厳しく批判するのである(Thompson 1978)¹。ここから含意されることは、結局のところ、文化主義にとって「経験」とは、意識と歴史的諸条件が交差する「生きられた」領域の基礎として保持されなければならなかったのである。

しかし、ホールは構造主義の知見から次のように述べている(Hall op cit.42)。ホールが参照するように、構造主義においては「経験」はどんなものの基礎にもなり得ない、なぜなら、構造主義の考え方によると、人はその歴史的諸条件を、文化における無意識の「カテゴリー」、「等級付け」、「フレームワーク」において、また、それらを通してしか「生きる」ことが出来ないし、経験することが出来ないからである。これらのカテゴリーは経験からは析出されない。むしろ経験はそれらの「効果 effect」として現れる。構造主義の知見によれば、人々の意識に外在する無意識の構造が見出されるということである。ここでは、「経験」は何らオーセンティックなものではなく、構造の「効果」としてとらえられる。アルチュセールが言うように、それは現実の反映ではなく、「想像的關係」として構成され

る。アルチュセールにとっては、この「想像的関係」が「国家のイデオロギー装置」にみられるように、イデオロギーによる「誤認」、「再認」のメカニズムによって、生産様式それ自体の再生産として保持されることになるのであった。

この点から「文化主義」と「構造主義」の二つのパラダイムは分岐していくことになる。文化主義は、意識を中心とする文化の実践を重視してきた。しかし、これらはアルチュセールやジャック・ラカンによって特徴的なように、主体が、言語や文化のカテゴリーによって析出されるというようなラディカルな命題には遠かった。言語や文化というこれらのカテゴリーは構造主義が言うように、「無意識の構造」としてあらわれる。つまり、構造主義の「人間」の概念は、彼ら自身が歴史を作る活動的な行為者agentsというよりも、構造の担い手として位置づけられることになる。アルチュセールがいうように「理論Theory」(Althusser 1965)における非イデオロギー的で科学的言説の構成として、歴史的「論理」よりも「構造」が強調されている。

ホールはアルチュセールを評して、「構造」という「全体the whole」においては、アルチュセールのいう「重層的決定」という概念は、諸実践の間の差異differencesを通して構成される統一体を考えるための概念的可能性がある、という(Hall op cit.44-45)。差異によって様々な実践の特殊性を概念化することを可能にしたというのである。しかし、文化主義はそのような「全体」における複雑性を、前節のウィリアムズにみられるように、感性的な人間の活動性というブラクシスの「単一性」に還元させてしまったということである⁵。アルチュセールは、このような「全体性totalty」が含意する「単一性」を批判し、「複合的全体」の知見から、社会の「重層的決定」を重視したのである⁶。文化主義も様々な実践の

特殊性を主張するのだが、しかし、この特殊性を結局は理論化することが出来なかったということである(Hall op cit.45)。

アルチュセールは、「イデオロギー」の概念を古典的マルクス主義のいわゆる「虚偽意識」という定義から解放したわけであるが、ホールによると、「経験」と「イデオロギー」に関して、文化主義はイデオロギーは概念の中心ではなかったということである。権力を立証することと「経験」への参照は、文化主義と「イデオロギー」の適切な概念化の間に障害を押しつけたのであった。

しかし、アルチュセールにももちろん問題があった。70年代のアルチュセールの「国家のイデオロギー装置」論に見られるように、「イデオロギー」を支配階級に解消してしまうような読解は、アルチュセール自身が述べていたイデオロギーの相対的自律性を議論することが不可能になってしまう。しかし、それにも関わらず、「イデオロギー」概念のカルチュラル・スタディーズへの貢献は、結局のところ文化主義よりも構造主義の流れにおいてであったのである。

「構造主義」と「文化主義」の対話

ホールは文化主義の図式のなかにも構造主義のタームを読みこんでいる。そのひとつがウィリアムズにもみられる「構造」に関するものを「抽象力abstraction」から読み説くというものである。

レヴィ＝ストロースやアルチュセールは、マルクスが主張したように、「人々people」の間の関係に還元するよりも経済という構造の関係を考えることを可能にした⁷。このような、裸の眼で見ることの出来ない関係と構造を明らかにするために現実の複雑性を分析するには、思考の実践が要求される。これは既に、マルクスが

『資本論』の序文で述べていたことである。

「経済的諸形態の分析では、顕微鏡も化学試薬も役には立たない。抽象力がこの両方の代わりをしなければならない。」(マルクス 1972:22)

ホールによれば、抽象力に関して、構造主義はこの命題を極大にしたと考えられる。構造主義者によって認められたことは、ここでマルクスがいうような「抽象力」、すなわち「現実関係」が専有する思考の道具としての抽象の必要性だけではなく、様々なレベルの抽象の間の絶え間ない複雑な運動でもあった。それは、ウィリアムズらが議論したものでもあるということである。ウィリアムズも「生活の仕方全体」や「感覚の構造」に言及することによって、意識から抽象される無意識の「構造」に考察の対象を向けていたのである*。ホールはここに構造主義との相同を見出している。

ここで含意されている構造主義の主張は、思考は現実の単なる反映ではなくて、さまざまなレベルの抽象が接合されたというものである。だから、アルチュセールの理論偏重を批判するトムソンが特に重視する「経験」から導かれる、理論主義と経験主義の対立という二分法は「理論」と「実践」の問題を脇に追いやってしまうのである。このような二分法は構造主義と文化主義の出会いにおいて記され形作られたものであった。

トムソンはアルチュセールに対して過剰に反論を展開しているのだが、頑固なまでに「経験」を中心にそえるトムソンには、「理論的实践」と「抽象力」の観点からやはり限界がある。ホールはトムソンのアルチュセール批判に対して、自身がイギリスにおける「アルチュセール派の契機Althusserian moment」¹⁴は重要なものであったと言明し、「理論的实践」(Althusser 1965,1965=1990)を想定しつつ、「実践」におけ

る困難を「理論」の問題として解決しようとするのである(Hall 1981:380-382)。それは、ウィリアムズと構造主義のあいだの「感覚の構造」と「構造」に接点を探りながら、カルチュラル・スタディーズに構造主義の主張を導入しようとする試みに結実することになる。

また、ホールは文化主義の理論的伝統からもカルチュラル・スタディーズへの貢献を引き出している。ここでグラムシが引き合いに出される。ホールはグラムシのいう「常識 common sense」のなかに組織化されたイデオロギーである無意識の構造を読み込んでいる(Hall.1986:45)。

ホールは別の論文で次のように述べている。

「まさに、コモンセンスの「自然発生性」、透明性、「自然性」こそが、さらにコモンセンスがその前提の探究を拒否している事実、変化や訂正に対するその抵抗、簡単な認知のその効果、そして、コモンセンスが移動する閉じられた循環、などがコモンセンスを一度にしかも同時に、「自然発生的」で、イデオロギー的で、そして、無意識的なものにする。コモンセンスを通しては「事物がどのようになっているのか」を知ることが出来ない。発見できるのは、事物の既存の図式の内部で「それらがどこにあてはまるか」ということだけである。このようにして、コモンセンスの「当然性」のために、それは一つの媒介として確立され、そのなかで、それ自身の前提と予測は、一見したところコモンセンスの透明性のために「見えなく」されている。」(Hall.1977:325.)

これも文化主義な伝統をアルチュセール派構造主義のイデオロギー論から解釈する試みであった。

ところで、ウィリアムズは、1973年の論文「マルクス主義文化理論における土台と上部構造」(Williams 1973)において、グラムシの「へ

ゲモニー」概念を取り上げていた。ホールのグラムシ解釈は、ウィリアムズからポスト構造主義以降の社会理論であるエルネスト・ラクラウら「ポスト・マルクス主義」を経由して練り上げられた読解が援用されているようである¹⁰。構造主義的分析は70年代以降、思想史の流れの中でそのスタティックな性格が批判されるようになるのだが、ホールもこの潮流のなかでカルチュラル・スタディーズの理論を練り上げていったと思われる。

ホールは、グラムシのヘゲモニーの概念を復活させながら、構造主義の弱点を補っている。それは、ヘゲモニーという揺らぎをはらみながら均衡を保つ、重層的に決定される社会という観点を導入することによって、構造主義に顕著であるあらかじめ想定された中心点を導入するような決定論的色彩の濃いスタティックな分析を退けたのである。また、このようなヘゲモニーの領域で文化の受容者が積極的にメディアやポピュラーな文化的な商品に「意味」を見出し、それに対して干渉していくプロセスも、有名な「コード化/読解モデル」に顕著のように強調されているのである（Hall 1980）。

おわりに

ホールは文化主義のこのような経験に対しては批判的であったが、ウィリアムズの「感覚の構造」のなかに「無意識の構造」を読み込むことにより、構造主義の成果をカルチュラル・スタディーズのなかに取り入れた。ホールはウィリアムズの中に人々の活動の経験的な観察からは導かれぬ無意識の領域を構造主義の知見に重ね合わせたのである。

また、ホールがイデオロギーを文化の領域と

して経済から分離しながらそこに特別の地位を与えて考察の対象としているのは、たとえアルチュセールらの知見が入り込んでいてもアルチュセール自身は文化については殆ど語っていないことを考えてみると、もともとはウィリアムズの文化理論からの影響が働いていると考えることが出来る。

このようなホールらのカルチュラル・スタディーズの試みは、ローレンス・グロスバークが述べているように、「アルチュセール派構造主義によって、ウィリアムズを読み直すことにある」（Grossberg op cit.25）ともいわれている。しかし、アルチュセールの理論もホールには満足いくものではなかった。ホールはアルチュセールをも克服する必要があったのである。

その過程のなかで、カルチュラル・スタディーズにとって忘れてはならないのがもう一つの潮流である、エルネスト・ラクラウらによって提唱されている「ポスト・マルクス主義」の知見である。これは、ホールらがアルチュセールの影響を相対化するときに、欠くことの出来ない理論的指標となっているのである¹¹。

では、なぜ、ホールはアルチュセールの理論枠組みを用いながらそれを克服しなけりばならなかったのか。ここでは詳述することができないが、ホールは文化やイデオロギーといった「上部構造」の「自律性」や「重層的決定」について議論したかった。しかし、アルチュセールは「上部構造」の「相対的自律性」については議論したが、それでも「最終審級における経済の決定」を保持することにより、結局は経済決定に陥ってしまっているのである。これを避けるためには、ラクラウら「ポスト・マルクス主義」によるアルチュセールの再定義が参照される必要があった。

ホールは、ウィリアムズやラクラウらを参照

しながら、「上部構造」である「文化」や「イデオロギー」が「土台」である経済によって決定されてるのではなく、支配的關係である「ヘゲモニー」によって複合的に「接合」される様を、カルチュラル・スタディーズの中心的な課題としたのである。だから、カルチュラル・スタディーズに対してしばしば寄せられる批判（例えば、アルチュセールに依拠しながら、文化の自律性のみ強調して、経済の下部構造について無視しているのはおかしい、など）は、この点で問題を正確に捉えていないのである。

ホールらの構造主義によるウィリアムズらの読み直しは、その後のカルチュラル・スタディーズの展開に大きな影響力を持った。しかし、このようなアプローチ以外にも、彼らが残した研究は、別の視点からも考察されるべき知的な源泉であると思われる。事実、歴史学の分野を中心にして、そのような作業が行われてきている。本稿では、ウィリアムズにおける「伝統」の継承と「文化」との關係について、思想の連続性の観点からアプローチしたが、残された問題は多い。今後の課題としたい。

<註>

- 1 リーヴィスやこのあたりの経緯については、(Eagleton 1984=1988)の特に第4章を参照せよ。また、ホガートやウィリアムズは「レフト・リーヴィス主義者Left Reavisist」とも呼ばれている。例えば、(Strey 1993: 43)。
- 2 E.P.トムソンはウィリアムズの「伝統」の継承に対しては批判的であった。(トムソン 1962)を参照。
- 3 例えば、エリオットの「生活の仕方全体」に言及した(Williams 1958b: 237)など。次節で考察されるように、ホールは「生活の仕方

全体」における「無意識の構造」の着目に構造主義との相同性を見ている。

- 4 アルチュセールは後に、自らの理論偏重を「自己批判」している。トムソンの『理論の貧困』(Thompson 1978)におけるアルチュセール批判に対する、ホール、リチャード・ジョンソンの反論は、(Hall 1981: 378-385)、(Johnson 1981: 386-396)。
- 5 例えば、ピエール・ブルデューも「プラクシス」の単一性を批判している(Bourdieu 1980)。
- 6 アルチュセールのいう「全体性 totality」と「全体 whole」の区別については(Althusser 1975=1990: 219)を参照。
- 7 ウィリアムズとホールの間には、マルクスの評価に対しても強調点が異なる。文化主義は「1844年の草稿(経済学・哲学草稿)」に影響を受け、ホールはアルチュセール読解を通した『資本論』に影響されている(McRobbie 1994: 45)。
- 8 しかし、正確にいうと構造主義のいう「構造」とウィリアムズのいう「感覚の構造」は、その「構造」自体の性質が異なる。ウィリアムズは「感覚の構造」は「がっちりとした明確なものである」(Williams 1983: 49)というが、構造主義でいわれている「構造」は「がっちりとした明確なものではなく、しばしば二項対立として現れる項目の間関係性の中で現れるものである。
- 9 イギリスにおける「アルチュセール派の契機」については、(Benton 1984)、(Davies 1995)(Easthope 1988)、(Stray 1993)。
- 10 ラクラウラの「ヘゲモニー」解釈については、(栗谷 1997)で考察した。
- 11 例えば、(栗谷 1997)を参照せよ。なお、アルチュセールの理論構成と社会変動のモデルについては別稿を準備中である。

<参考文献>

- Althusser, Louis. 1965. =1990. "Theory, Theoretical Practice and Theoretical Formation: Ideology and Ideological Struggle" Gregory Elliott. (ed). *Philosophy and the Sontaneous Philosophy of the Scientists and other essays*. Verso.
- 1965. *Pour Marx*. Editions la Decouverte. =1994. 河野健二ほか訳 『マルクスのために』 平凡社
- 1975=1990. "Is it simple to be Marxist in Philosophy" *Philosophy and the Sontaneous Philosophy of the Scientists and other essays*. Verso.
- Arnold, Mathew. 1935. *Culture and Anarchy*. =1965多田英次訳、『教養と無秩序』 岩波文庫
- 粟谷佳司、1997「カルチュラル・スタディーズと『意味作用の政治学』」『同志社社会学研究』創刊号
- Benton, Ted. 1984. *The Rise and Fall Structural Marxism*. St. Martin's Press.
- Bourdieu, Pierre. 1980. *Le sens pratique*. Minuit=1988. 今村仁司、港道隆訳、『実践感覚1』 みすず書房
- Chun, Lin. 1993. *The British New Left*. Edinburgh University Press
- デザン、スザンヌ 1993「E・P・トムスンとナタリー・デーヴィスの著作における群衆・共同体・儀礼」
リン・ハント編、『文化の新しい歴史学』 筒井清忠訳、岩波書店
- Davies, Ioan. 1996. *Cultural Studies and Beyond*. Routledge
- Dworkin, Dennis. 1997. *Cultural Marxism in Postwar Britain*. Duke University Press.
- Eagleton, Terry. 1984. *The Function of Criticism*. =1988大橋洋一訳、『批評の機能』、紀ノ国屋書店
- Easthope, Antony. 1988. *British Post- Structuralism since 1986*. Routledge.
- Eldridge, John and Lizzie Eldridge. 1994. *Raymond Williams: Making Connections*. Routledge
- Eliot, T. S. 1948. *Notes towards the definition of culture*. =1951深瀬基寛訳、『文化とは何か』 弘文堂
- Grossberg, Lawrence. 1993. "Formations of Cultural Studies." *Relocating Cultural Studeis*. Routledge.
- Hall, Stuart. 1977. "Culture, the Media and the 'Ideological effect'" James Curran et al (eds). *Mass Communication and Society*. Edward Arnold.
- 1980. "Encoding/decoding" Stuart Hall et al eds. *Culture, Media, Language*. Routledge.
- 1981. "In Defence of Theory" Raphael Samuel. ed. *Peoples History and Socialist Theory*. Routledge & Kegan Paul.
- 1985. "Signification, Representation, Ideology: Althusser and Post-Structuralist Debate." *Critical Studies in Mass Communication. 2*
- 1986. "Cultural Studies: Two Paradigms" *Media, Culture and Society: A Critical Reader*. Sage.
- Hebdige, Dick. 1988. "Towards a Cartography of Taste 1935-1962" *Hiding in teh Light*. Routledge.
- 市橋秀夫、1987「E・P・トムソン—経験の政治学」『クリティーク』No.7.
- イングリシ、フレッド、1992 『メディアの理論』伊藤誓、磯山甚一訳、法政大学出版局
- Johnson, Richcard. 1981. "Against Absolutism" . Raphael Samuel. ed. 1981. *Peoples History and Socialist Theory*. Routledge & Kegan Paul.
- Johnson, Richard. 1986/7. "What is Cultural Studies Anyway?" in *Social Text. No. 16*.
- Levi-Strauss, Claude. 1958. *Anthropologie Structurale*. =1972荒川幾男ほか訳、『構造人類学』 みすず書房
- マルクス、カール 1972『資本論』第一巻、第一分冊、岡崎次郎訳、国民文庫
- McRobbie, Angela. 1994. *Postmodernism and Popular Culture*. Routledge.
- 岡田直之 1992『マスコミ研究の視座と課題』東京大学出版会
- Robbins, Bruce. 1995. "Foreward" Williams, Raymond. 1981=1995. *The Sociology of Culture*. The University of Chicago Press

- Samuel, Raphael. ed. 1981. *Peoples History and Socialist Theory*. Routledge & Kegan Paul.
- 佐藤毅 1995 『日本のメディアと社会心理』新曜社
- Strey, John. 1993. *An Introductory Guide to Cultural Theory and Popular Culture*. Harvester Wheatsheaf.
- トムスン、E. P. 1962. 「R・ウィリアムズの『長い革命』批判」田村進 編. 『文化革新のヴィジョン』合同出版
- E. P. 編 1963 『新しい左翼』福田歆一、河合秀和、前田康博 訳、岩波書店
- Thompson, E. P. 1978. *The Poverty of Theory*. Merlin.
- 1980. *The Making of English Working Class*. Vintage Book.
- Williams, Raymond. 1958a "Culture is Ordinary." *Resources of Hope*. Verso.
- 1958b. *Culture and Society 1780-1950*. The Hogarth Press. =1973若松繁信、長谷川光昭訳、
『文化と社会』、ミネルヴァ書房
- 1961. *The Long Revolution*. =1983若松繁信、妹尾剛光、長谷川光昭訳、『長い革命』、ミネ
ルヴァ書房
- 1973. "Base and Superstructure in Marxist Cultural Theory" *Problems in Materialism and
Culture*.
- 1976. *Keywords*. Oxford University Press. =1980 岡崎康一訳、『キーワード辞典』、晶文社
- 1977. *Marxism and Literature*. Oxford University Press.
- 1980=1997. *Problems in Materialism and Culture*. Verso
- 1981=1995. *The Sociology of Culture*. The University of Cicago Press. =1985小池民男訳、
『文化とは』、晶文社
- 1983. *Writing in Society*. Verso.
- 1989. *Resources of Hope: Culture Democracy and Socialism*. Robin Gale (ed). Verso.